

煎茶道を通しての 国際文化交流に思うこと

煎茶道松風流(富山) 鍋島 道雄

煎茶道松風流(富山)の先代家元は、煎茶道の心におもてなしの心を世界に紹介したいというのが口癖でした。

三十年ほど前、金沢大学に留学していたフランス人女性のシルヴィ・ギシャル・アンギスさんに、煎茶の基本である文人茶の世界を徹底して教え込まれました。先代家元は、パリの彼女の自宅まで訪問されています。



2000年 デンバー市フェスティバルでの煎茶会

くの人達に日本茶を知っていただきました。

二〇〇五年十一月、パリ市の国際大学都市日本館にて、海外での正式な煎茶会を行いました。百五十六名の入席者があり、にぎやかで華やかな茶会に、皆さん喜んでおられました。帰国後、すぐに在仏日本大使館広報センターの北川一等書記官より、次のよう

メールが届きました。「お茶会では、大変素敵な経験をさせていただきました。まことにありがとうございます。お茶と云うと大変堅苦しいイメージがあったのですが払拭されました。このような取り組みが日本に対するより良い理解が広がる第一歩であり、おそらくソフトウェアしか持たない我が国にとっては一番の武器になるだろうと思います。」(原文のまま)

つて、当流は海外の茶会を開廷することに抵抗はありません。一九九五年十二月のホルルでの「ささやか煎茶会」を皮切りに、一九九七年にシドニーでも開廷しました。二〇〇〇年には、高山・デ

ンバー姉妹都市提携四十周年式典のイベントに組み立て式の茶室を運び、下畑喜久英さんの琴の演奏をバックに本格的な茶会を開き、好評を得ました。その後、二〇一〇年の五十周年記念式典の折にも同大会で点前をして、気軽に多

ソルボンヌ大学ギャラリー・コルバートにて煎茶会を開廷し、この時も多くの人に煎茶を楽しんでいただきました。

翌二〇〇八年十月四日〜五日の二日間、フランスのアルザス地方のサンディエという小さな都市にて、世界地理学会主催による日仏修好百五十年記念イベントに開廷を要請されました。サンディエ市長をはじめとし、二日間で約八百七十人の参席者があり、長い行列が出来て三時間も待つて入席された方もありました。目の回る忙しさでしたが、子どもを含め皆さん初めての日本茶を「おいしい」と言ってくれました。

二〇一〇年九月十八日には、知人の紹介によりオランダのライデン市において、日本文化にとって因縁の深いシールポルトハウスの展示室での煎茶会を開廷しました。



2012年 パリ市ギメ美術館での煎茶会

二〇一二年十一月三日には、パリ市ギメ美術館において茶道具展の協賛として煎茶

会を開催しましたが、この時は事前に申し込みされた方のみで、私の知人でも入席できない人がいました。

シルヴィさんが、一昨年パリ市にて煎茶教室を開かれました。パリ煎茶教室の披露茶会をする時は、馳せ参じてお祝いしようと思っております。在仏大使館書記官の言葉ではありませんが、ソフトウェアとして煎茶道を世界の多くの人に知っていただきたいと念じています。

文化協会後援 催事のお知らせ

- 飛友会カメキチ 写真展
 - ◇日時 九月十一日(金) 十三日(日) 午前九時三十分〜午後九時(最終日 午後五時)
- ◇会場 文化会館二階展示室
- ◇入場無料
- 紅葉と紫式部展〜大観、玉堂、松園他
- ◇日時 九月十七日(木) 十二月八日(火) 水曜休館
- ◇会場 光ミュージアム
- ◇入館料が必要
- 華道家元池坊飛騨支部 巡回講座
 - ◇日時 九月二十七日(日) 午前十時〜午後三時三十分
- ◇会場 文化会館小ホール
- ◇参加費 三千元

「風目(目)」

昔「ポコペン」という遊びがあった。鬼になった子供は、壁や立木に目隠しをして立つ。後ろに回った子供達が「ポコペンポコペン誰突つた」と言つて、鬼の背中を突つて、鬼は振り返つて、突つた子を当てる。当てられた子は次の鬼になる。

このポコペンの語源が、今やと分かった。元は中国語の「不可賠銭」で「プーコウベンシエン」と読み、それが「ポコペン」となる。この夏出版された、瀬戸山玄というドキュメンタリストが十八年がかりで書いた『狙撃手、前へ』という本に出ている。志願兵で、優秀な狙撃手だった男からの聞き取り。中国人達が「この銭では元手が足りない」とか「それではとても割に合わん」というときに使ったらしい。

筆者の父も山砲兵で、中国で足を撃たれた。瀬戸山さんは「不可賠銭」と分かっている十八年かけて一冊の本を書いた。

そんなにまで、戦争そのものがポコペンだと訴えたかった人。高山在住。

〈ガンモン毛筆〉